

# 描 出

## ——テキストの研究にかかわる一つの問題提起——

野 村 眞 木 夫

### 0 はじめに

印欧語に関して議論されている「描出話法（体験話法・自由間接話法）」という範疇を、日本語の一定の表現に結びつけようとするところが少なくない。しかし、日本語においてその範疇が存在するか、という疑問をはじめとして、文法論から文理論にわたるさまざまな議論の展開するところである。本稿のねらいは、日本語における描出話法の存否を問うのではなく、多様な議論のなかに錯綜する言語現象や方法意識を問いたいなおすことで、日本語の内在する問題を「描出」という範疇に即して整理することにある。

### I 日本語の描出話法（体験話法・自由間接話法）に関する研究の動向

テキストの部分を、表現の機能に即して「描写」・「説明」などに類型化することがなされている。これらの類型は、テク

ストが虚構であるかどうかにかかわらず、任意のテキストに見出される類型である。それに対して、日本語の「描出話法（体験話法・自由間接話法）」が問われるとき、主として、三人称の小説あるいは物語についてとりあげられてきている（山田（一九五七）、波多野（一九六六）、西尾（一九六九）、保坂（一九七七）、野村（一九八一・一九八三）、工藤（一九九三）など）。このような動向に対して、鈴木（一九八八・一九九二）は、ドイツ語についてであるが、一人称小説における体験話法やノンフィクションにおける体験話法を指摘している。

このことは、テキストに虚構と非虚構の境界をどのようにに認知するか、といった問題と関連する（Hanburger (1973)、中村（一九九四））。

また、Kuroda (1973)、鎌田（一九八四）、工藤（一九九三・一九九五）、沢田（一九九三）、寺倉（一九九五）などは、統語論的な事実と、文体的な現象とを照合させながら、日本語の描出話法とみなされうる表現をとりあげている。このとき、再帰代名詞、主観や思考の表現、時間副詞、テンスとアスペクト、主体や視点などの範疇が指標あるいは説明概念とされている。

さらに、描出話法が「話法」という範疇のもとでとらえられる以上、引用の現象ときりはなすことができない。ただし、これを積極的に現象の説明にとりこむかいなかには、態度のゆれがみとめられる。積極的に引用の構造に結びつけようとする説明には、鎌田（一九八四）、寺倉（一九九五）などがある。個々の研究においては、描出話法を典型的な直接話法・間接話法からの派生においてとらえるか、それ以外の範疇を描出話法を成立させる要因としてどこまで、あるいはどの段階で認めるか、という認識の違いが作用している。

なお、近年の大方の研究に対して、文法論上の事実に関する認識が希薄であるとの指摘があり、とりあげる言語のちがいや、語学研究と文学研究の境界をのりこえるべきであることが主張されている。また、文法論にたつとしても形態と意味とその他を重視するかが問われるし、本来、印欧語について定義・議論されてきた描出話法という範疇を、日本語にも適用しようとするときの制約が、おのずから生じることも忘れてはならない（保坂・鈴木（一九九三）、黒沢（一九九四）、野村（一九九五））。そもそも、日本語に描出話法という範疇が、とくに形態的に、成立するかどうかを検討の対象となるのであり、説明概念としての「視点」や「話法」「人称」などの有効性があらためて問われることになる（堀井（一九八三）、中川（一九八三）、保坂・鈴木（一九九三）、中山（一九九五））。

そうであるとしても、印欧語の描出話法に対応する日本語の表現を類型化することは可能であり、そこに「描写」・「説明」などとなる「描出」とよぶべき範疇を想定することに

意味があるのである。それは、テキストの任意の人物の発話や思考の表現を、「と」などによる明示的な引用の標識を欠いておこなう、しかも、自由直接話法（内的独白）ともことなる表現類型としてとらえられるのである。

## Ⅱ テキストに即して問題を確認する

つぎに、日本語について描出話法が議論されるとき、しばしば言及されてきた例をとりあげて、問題点を具体的にかんがえてみよう。

### （１）

① 順二郎は庭の方に顔を向けた。② 雁来紅がまだ黒ずんだ赤さを残している。③ 日があたると深紅にかがやく。④ 多実子は母が不潔だという。⑤ 不潔ということが、若い女にとって、何よりも堪え難いことであるらしい。⑥ しかし、不潔とは一体なにか。⑦ 不潔に関する一定の規準などというものは無いのだ。⑧ ただ、不潔と感ずることが不潔である。⑨ 要するに母が不潔だというのは多実子の主観であるに過ぎない。……

⑩ 不潔であるか否かはともかくとして、母が本当に伊原章之介を好きだとすれば、ここに多少の問題はある。

⑪ その母が、なぜ多実子に伊原をすすめるのか。⑫ 嫉妬があるべきところに、なぜ女の媒合本能があらわれて来たのであろうか。

⑬多分母は、継母という立場、後妻に来て未亡人になった女という自分の立場に、一種の劣等感をもっているに違いない。⑭その劣等感とはや性格化しており、彼女は無意識のうちに自分の欲望をおさえるようになっていたのではなからうか。⑮伊原章之介に魅力を感じたのは、彼女のなかに生きている女性の本質である。⑯その伊原を自分で手に入れようとは思わないで、却って多実子に与えようとするのは、伸子夫人の劣等感から来た行為であるかも知れない。⑰ここに彼女の二重性があり、感情と言葉との矛盾がある。

⑱もっと悪く解釈すれば、母は母という立場に縛られて、伊原とたびたび会うことが出来ない。⑲そこで多実子との縁談を進めて行けば、母は伊原と会う機会をつかむことができるのだ。⑳彼女は多実子をおとりに使って伊原に接近しようという、悲痛な手段を考えているのかも知れない。……㉑しかし、そこまで想像するのはあまり空想的で、却って面白くなかった。

㉒青い空のどこかで花火のはじける音が、続けざまに聞えてきた。㉓近くの学校で運動会をやっているらしい。㉔「法事があるのは、ちょうど良い機会だ」と順二郎は冷たい笑いをもらしながら言った。

(石川達三『自分の穴の中で』新潮文庫47—48)

この例について、徳沢(一九六五)は次の四点を指摘する。

(a)物思いの「くぎりくぎりに「……」がある。(⑨⑲)

(b)「しかし、そこまで想像するのは」から、半分記述に見えた部分も、作中人物の主観であることは疑えない。(⑲)

(c)体験話法には、よく一般的真理がまぎれこむが、「不潔ということが……無いのだ」がそれである。(⑤⑦)

(d)「あろうか」「なからうか」という疑問体の表現は、体験話法の常用手段である。(⑫⑭)

保坂・鈴木(一九九三)の指摘は次の二点である。

(e)「しかし、そこまで想像するのは」が手がかりとなって、「多実子は母が」から「悲痛な手段を考えているのかも知れない」までが体験話法である。(⑫)

(f)ただし、その部分には思考者順二郎がどこにも三人称で明示されていないので、主語がゼロ記号の自由直接話法であると解釈することも可能である。

さらに次の点が、(1)について指摘できよう。

(g)「雁来紅がまだ黒ずんだ赤さを残している。日があたると深紅にかがやく」の部分が、順二郎の観察した情景であるとすれば、これも描写ではなく描出でありうる。直前の「顔を向けた」が視覚の働くことを可能的に含意するからであり、文末がこの部分で「タ系列↓非タ系列」と転換していることも標識となる。(①③)

(h)「しかし、そこまで想像するのは」の「そこ」の指示範囲が不確定である。また、「想像」が先行文脈のどの範囲に言及しうるのか不確定である。(⑫)

(i)その部分について「らしい、であらうか、に違いない、なからうか、かも知れない」「多分」が「想像」の標識となりう

る。(5)~(2)

(j)「不潔ということが……無いのだ」が一般的真理の表現、すなわち総称文であるとしても、「らしい」のモダリティによつて総称性の度合いが低められている(野村(一九九〇・一九九一))。その認識的なモダリティが語り手と作中人物の両者に共有されているのか、読者にも帰属しうるかどうか、という読みとりかたに応じてその度合いが変化するのである。

(5)

(k)保坂・鈴木(一九九三)の指摘する部分が描出(体験話法)

であるとして、同一の作中人物が「母」「伸子夫人」「彼女」という三つの表現で言及されている。このことから、その部分が均質的なテキストとして読みとられない可能性が生じる。

(l)保坂・鈴木(一九九三)が地の文とみなす「しかし……面白くなかった」も順二郎の思考と解釈することができ。ただし、これが描出だとしても直前の「……」までの「想像」の部分と、その度合いに差をみとめる必要がある。これは「……」によつて区切られていることと、文末がタ系列に転換していることによる。

(m)徳沢(一九六五)、保坂・鈴木(一九九三)ともに引用していない部分であるが、「青い空の……やっているらしい」が順二郎の知覚と思考に帰属すると解釈すれば、この箇所も語り手による描写ではなく描出として読みとることができる。

さて、以上の諸点を整理しよう。

(A)テキストの部分が描出であることを判定する標識が、当該部分の内部あるいは近傍に存在する。その標識には、叙法副

詞、文末のタ系列と非タ系列の転換、文末のムードの表現、思考を意味する語句、総称文の存在、などがある。

(B)作中人物を指示する表現が省略されている文脈では、その部分を描出と判定するかいなかの不確定になりうる。これは、その近傍の文脈を読者がどのように関連させるのかに依存して、表現の属性が決定されるということである。

(C)テキストの部分が描出であるとしても、その度合いが一樣でない可能性がある。たとえば、文末のムードの表現を、語り手・作中人物・読者のあいだでどこまで共有させて読みとるのか、総称文のあらわす知識をどこまで一般的なものとして読みとるのか、などにゆれが生じうる。人物の指示のしかたが多様であるときも、それに応じて描出の度合いがゆれる可能性がある。この度合いの決定には、表現の形態が機能する同時に、読者の読みとりかたにゆだねられる側面がすくなくない。

(D)テキストの部分を描出と認めるとしても、その範囲が一意に定まらないばあいがある。すなわち、形態や意味のみに即して描出の範囲を特定することが困難なのである。これを別の側面から述べるならば、描出はテキストに内在するというよりも、読者において、あるいは読書行為において成立するということである。

これを要するに、描出の表現の産出は、文法形態がそこに機能するのは当然としても、さらに意味論の要因や、読者の読みとりかたにも少なからず依存しているということであり、読者のテキストへの参加が条件になるのである。

### Ⅲ 対象とするテキストの類型

(1)は、三人称小説にあらわれる描出であった。描出は、特に日本語については、この類型に即して論じられることが多かったが、対象とするテキストの類型は拡張する必要がある(鈴木(一九八八・一九九二)、保坂・鈴木(一九九三)、Chafe(一九九四))。

一人称小説の例をとりあげよう。

#### (2)

①夜は燈火が山の麓から田のあちこちに見えだした。  
②久しぶりに見る燈火は優しく、旅先にでもいるような感じがした。③食事の後片づけを済ますと、妹はくたくたに疲れて二階へ昇って来る。④彼女はまだあの時の悪夢から覚めきらないもののように、こまごまとあの瞬間のことを回想しては、ブルブルと身顫をするのであった。⑤あの少し前、彼女は土蔵へ行って荷物を整理しようかと思っていたのだが、もし土蔵へ這入っていたら、恐らく助からなかっただろう。⑥私も偶然に助かったのだが、私が遭難した処と垣一重隔てて隣家の二階にいた青年は即死しているのがあった。

(原 民喜「廃墟から」『夏の花』岩波文庫37)

文⑤に着目しよう。この文の前後で文末のタ系列と非タ系列との転換が行われている。直前の文④に「彼女は……回想して

は……」とあるが、文⑤は、その回想の表現として読みとることが可能である。まず「土蔵へ行って荷物を整理しようか」の部分には、「と思っていた」でくくられており、「彼女」の回想であることが明示されている。

問題になるのは、以下の「もし土蔵へ這入っていたら、恐らく助からなかっただろう」の部分である。その表現中に、叙法副詞「もし」「恐らく」と、これに呼応する「していたら」と「だろう」がある。この条件表現を構成するモダリティは、さしあたり、作中人物「妹」彼女」に帰属させることができる。すなわち、文⑤は、このテキストの表層の語り手「私」を介した「妹」彼女」の回想の描出であると判定することができる。

また、このモダリティは、語り手「私」に帰属させても矛盾が生じない。この読みとりかたでは、モダリティは、語り手が「彼女」の回想に言及するとき、語り手の側から割り当てたものであり、そのモダリティは、文⑥の知識によって根拠づけられるものである。このような記述は、観察的に分割したものであって、実際の読書行為においては、「彼女」の回想に由来するモダリティの描出と、語り手「私」のモダリティとが複合して機能する。したがって、文④からの後方照応による判定と、文⑥からの前方照応による判定とが、読者において相互に作動するのである。

#### (3)

①六十歳というものは、もっと神聖な年齢のはずだった、と私はひやりとしながら考えていた。②宴会場が雄と雌の鬼ごっここの場に見えることは構わない。③しかし

自分がその場所で雄の一員として行動するのはあさましいことだった。④六十歳の年齢での人間の社会の見通しを、私は私なりに持っていたつもりなのに、酒場を経営する歌子と関係ができると、もう忽ち私は、この酒場へ来て何となくアットホームに感じている。⑤私はたしかに、押さえ切れないいやな所があつて、そのいやな部分で歌子をもとめている。⑥私はその自分の気質のことを考えると、すぐにも、歌子から逃げ出したい気持ちになつた。⑦しかし、今のところ私はここで岩井透清を待つていなければならなかつた。

⑧急に階下がにぎやかになつた。⑨私の前にいた女が耳ざとく聞き分けて、

「あら、マダムが帰つたわ」と言つた。

(伊藤 整『変容』岩波文庫285)

(3)も一人称小説である。まず、①の「考えていた」が、近傍の文脈が「私」の思考の表現でありうることの標識になる。文②は、「私」による総称の判断であり文末が非タ系列であるのは、この総称性によるものである。これは描出として読みとる標識となる(野村(一九九一))。これに続く、文③は「私」の価値判断、④⑤⑥は思考の状態や変化、⑦は当為の判断の表現である。文⑧以下は状況の描写である。このうち文③と文⑥⑦は、文末がタ系列であることから、いわゆる自由直接話法ではない。文⑦には「今のところ」という思考している現在に直示的に言及する時間の表現があつて、これとタ系列の文末表現と

が共起するシステムが形成されている。これは、語り手としての「私」と作中人物としての「私」とが、同一の事態に言及するシステムであり、描出の例とみなされる(Battled 1983) 87・99)。文⑥にそのような標識はないが、文⑦とこととなる属性をあたえる根拠はない。文④⑤では、④の「この酒場」という指示表現と自称代名詞「私」の使用、非タ系列の文末表現から自由直接話法である可能性が生ずるが、描出と読みとつても矛盾はない。このように読みとると、文②から文⑦までを描出の表現とみなすことが可能となる。

それでは、文②から文⑦までの文末が、タ系列と非タ系列の混在するものとなつてゐることは、どのような文脈的な効果をもたらずであらうか。

まず、タ系列の文③は、②の総称の判断とのあいだに矛盾がある。「しかし」がその標識となる。また、思考の変化の表現であるタ系列の文⑥も、直前の文④⑤の叙述とのあいだに整合しない判断を内在させている。すなわち、文④「アットホームに感じている」・文⑤「歌子をもとめている」の部分と文⑥「歌子から逃げ出したい気持ちになつた」との意味論上のくいちがひである。さらにタ系列の文⑦は、文⑥の「気持ち」とのあいだに矛盾がみいだされる。すなわち、文⑥「逃げ出したい」という願望と文⑦「待つていなければならなかつた」という当為の關係である。ここでも「しかし」が、矛盾の標識として機能する。

ここで、①から⑥までのタ系列の文は、「私」の「神聖」(①)とする価値判断の系列に属し、非タ系列の文は、これと矛盾する系列に属していると整理できる。文⑦はその二つの矛

盾する判断における、当為の表現である。このように、文⑦には、文⑥までの「私」の判断とのあいだに、アイロニックなずれを生じさせる効果を認めることができる。

要するに、タ系列の文と非タ系列の文の表現内容が相互に矛盾するように、この文脈は構成されているのである。これは、「私」が「私」に言及するという再帰的な文脈の組織がもたらす効果である。

(4) はノンフィクションのテキストである。

(4) ①「大野や勝山の人達は、私たち福井平野の者からみると、みな仏サンのように人が好いですよ」

と、物識り運転手の坪田さんがいった。

②「大野や勝山の人達を乗せて家まで送ると、ちょっと待っていてくれ、といって、畑の大根やキャベツなどをくれるんです。そういう経験が、二度や三度ではないんです。言葉も丁寧ですよ」

ともいったが、坪田さんのいうこの土地の気分が、私のかつての旅でのこの地の印象にもあった。

③「大変ですよ」

とも、坪田さんはいう。④日本でも有数の豪雪地で、昭和三十八年のいわゆる「三八豪雪」のときなどは、大野も勝山も、世界中から孤立してしまった。⑤そのときの話は、私もその後、しばしば聞いた。

(司馬遼太郎『街道をゆく』18 朝日文庫77)

このテキストの別の箇所を、保坂・鈴木(一九九三)が体験話法の例として指摘している。(4)は、「坪田さん」の発話に依存した記述であるが、文①②③にあらわれる「」をもちいた引用のうち、文③の「大変ですよ」は、その属性をになう対象が「」内に明示されていない。これに続く文④が、文③に対する説明(詳述)として機能する。つまり、文③の「大変ですよ」は、文④に展開したとき叙述が完成されるのである。この文④の情報は、文③からの後方照応の展開として読むと、「坪田さん」の発話を要約もしくは補完した表現として、「いう」の発話行動によって産出されたものと解釈することができる。このばあいには、説明の表現が描出の表現性になうことになる。逆に、文⑤からの前方照応においてとらえなおすと、著者の知識によって、「坪田さん」の不完全な発話をおぎなつたものと解釈することができる。

以上の例から、一人称小説はもとよりノンフィクションにも描出があらわれることが、日本語のテキストについても主張できる。さらに、着目した文に描出という属性を割り当てることができる。なかば、テキストを先行文脈から展開する方向で判定するか、後行文脈から逆行して判定するかによっても制約されることをのべた。これは、読者がテキストを処理する過程に依存するということであり、したがって、テキストに描出の属性を割り当てるのは読者のはたらかさだ、といえるのである。

#### IV 描出の標識はどこまで有効か

前節でとりあげた例では、描出とみとめた表現に隣接して思考や発話の標識となる、次のような要素が認められた。

- (1) ⑨「……」、②④「想像する」
- (2) ④「回想しては」、⑤「思っていた」
- (3) ①「考えた」
- (4) ③「いう」、⑤「話」「きいた」

「……」は、徳沢(一九六五)の指摘するように、思考の区切りの標識となっている。他の標識は、意味論的に、思考あるいは発話を含む。それゆえ、これらを近傍の文脈にともなうばあい、着目したテキストの部分に引用の痕跡を明示したものであるとして読みとることができる。これに対して、次の例はどうであらうか。

- (5) ①「そうか。それは残念だな。じゃ、さよなら」

②ばたんと扉をしめて、彼は廊下へ出た。③信じてもらおうなどと思っではない。④信ずるとは一体何だ。

⑤あの女は信じてもないくせに、さそいかけられればまた身をまかせ。⑥身をまかせて置いて、信じられないことと文句を言うのだ。⑦もしかしたら、信じられない事のスリルを楽しんでいるのかも知れない。⑧そうとすれば、あの女は不幸ではないのだ。⑨不幸だ不幸だと口では言いながら、もっと本質的なところで、ちゃんと幸福

になっているのではないだろうか。⑩それがなければ、いつまでも不幸のなかでぐずぐずしているはずはないのだ。⑪もしもそれが本当だとすれば、結局もてあそばれているのはおれの方かも知れない。……

⑫傘をさして小雨のなかを歩き、街のタキシードを呼びとめて乗った。⑬そして、要するに男女関係などというものは、どこかでちゃんと勘定が合っているのだ、と彼は思った。⑭勘定が合うからこそ、続いて行くのだ。⑮そう考えて、章之介は安心した。

(石川達三『自分の穴の中で』新潮文庫66)

(5)は、徳沢(一九六五)と保坂・鈴木(一九九三)がとりあげている。徳沢は、これを体験話法の例としてしめすが、どの部分をそれと認定するかは明言していない。保坂・鈴木は、①を直接話法、②を地の文、文③から⑩までを体験話法、⑪を自由直接話法、⑫を地の文、⑬以下を間接話法としている。ただし、⑪の「おれ」が③まで遡及しないとの条件においてである。もし遡及すると読みとるならば、文③から⑩までも自由直接話法と判定されるとしている。この認定に異論はない。さて、ここに「……」(⑪)や「思った」(⑬)が見えるが、これは、描出と認めた文③から⑩までの近傍にある。しかし、(1)の(4)のばあいのように、隣接はしていない。「……」は自由直接話法の表現に後続し、「思った」は地の文を経た間接話法の表現の文末である。したがって、これらは、当該の文脈が描出であることの直接の標識にならない。



標識としてとりだせるのは、「でもらおう」(③)、「のだ」(⑥)・⑧「もしかしたら……かも知れない」(⑦)、「のではないだろうか」(⑨)、「はずはないのだ」(⑩)などのモダリティの表現であり、これが章之介に帰属するだけでなく、語り手や読者の共有しうるものであるかどうか、という読みとりかたによって、判定がこととなる。また、保坂・鈴木の指摘しているように、「彼」(②)と「おれ」(⑪)は、それぞれ後方照応と前方照応とに作用しうるのだが、それをどのように読みとるかにも依存する。このようにして、描出の度合いが変化しうるのである。

したがって、文③から⑩までが描出あるいは自由直接話法と判定されうるとしても、択一的にそのどちらかに決定されるわけではなく、連続した尺度上に位置づけられることになる。またその位置づけは、個々の文の形態的な指標にのみよるのではなく、読者が近傍の表現をどのように関連させるかにも依存するのであるから、形態的な指標と描出の度合いとをあらかじめ対応させておくことはできない。

では、総称文はどこまで標識になりうるだろうか。

(6) ① こういう突発事件が一人の人間の心に入ってきて来て座を占めるまでには、奇妙な経過を辿る。② 事件の性質がどういふものであるかも知らずに、出がけに勝はまず相対的な現金を用意した。③ 事件というものは金のかかるものである。

④ A 浜へいそぐために東京駅へタクシーを走らせている勝の心は、どんな情緒とも関わりがなく、現場へいそ

ぐ刑事の心持にむしろ近かった。⑤ 想像よりも推理に熱中し、自分にそれほど重大な関わりのある事件に対する好奇心に戦慄していた。

(三島由紀夫『真夏の死』新潮文庫155)

文③は、総称文であり、②の事態に対する説明として機能する。また、これまでの研究史において、文③を描出と認定することはさまたげられない。しかし、この文の近傍に発話や思考の標識となる語句はなく、根拠は総称文としての属性だけである。すなわち、総称の判断が語り手と作中人物との両者に帰属し、さらに読者によってもこれが共有されうるということである(Bafield 1983: 98-118、野村(一九九一))。だから、この文③にしても、読者が語り手と作中人物とのあいだで、総称の判断をどのように帰属させるかに応じて、描出と判定するか、語り手による常識の記述として読みとるかの判定が左右されるのである。

さて、(5)(6)は、表現を描出と判定するための標識が、発話や思考に関連する語句ではなく、当該の表現そのものに内在する意味論上の属性や、表現の通達の特徴である例であったそこに、「……と思った」のような要素を想定することは可能であるが、そのようなもってまわった説明ではなく、表現の内在する属性から、直接、その特徴をみちびきだした方が現実的である。ただ、そのようなとらえかたをするならば、「描出語法」など「語法」という語をとまなう名称は、すでに適切ではなく、「描出」あるいは「描出表現」とでも呼ぶほうが、わかり

やすくなる。

それでは、「描出話法」という名称が、狭義の話法、すなわち引用方法の構造の類型に帰属する範疇をさし、したがって、近傍に発話や思考の表現であることを明示する標識があるばあいには有効であり、「描出」や「描出表現」という名称が、そうでないばあいをさす、というように分離するのが妥当であるかどうか。「話法」という用語を「語り」といった意味で使用するのであればともかく、引用の範疇に限定するのであれば、すくなくとも日本語のばあい、本稿でとりあげた例を総合的にとらえるためには狭義にすぎるのであり、留保しておくのが適切であるむしろ、これらの表現に共通する属性を「描出」とよんでおくべきであり、これが、テキストの任意の人物の発話や思考を、引用の標識を使用せず、自由直接話法とも異なり、語り手・読者にも共有される情報として産出する表現類型をさすものとなればよい。

## V 問題の整理

本稿では、印欧語の描出話法（体験話法・自由間接話法）に対応する日本語の表現をとりあげ、これまでの研究との関連において、問題を検討してきた。以下に、論点を整理しておく。

1 日本語のテキストに「描出」という表現の範疇を認定することができる。それは、テキストの任意の人物の発話や思考の表現を「と」などによる明示的な引用の標識によらずにお

こなう、また自由直接話法ともことなる、表現の類型である。

2 テキストの部分を描出と判定する標識が、形態的・意味的あるいは文の類型として存在する。ただし、形態的・意味的な標識であるとしても、描出と判定される文にそれが帰属するとはかぎらず、近傍の文の要素であるばあいがある。

3 テキストの部分を描出と判定するかいなかは、諸標識にたいする読者の読みとりかたに依存する。したがって、描出の範疇は読者によって産出され、描写などとの境界が作りだされる。

4 テキストの部分を描出と判定するかいなかは、前方照応的に判定するか、後方照応的に判定するか、というテキストの読みとりかたに依存するばあいがある。

5 テキストの部分を描出と判定するとき、その範囲は読みとりかたに応じて決まる。

6 描出は読者のテキストへの参加が条件となる。読者はテキストの人物の発話や思考に言及しうるのである。

7 描出という属性は均質でなく、その度合いが認められる。

8 描出を内在しうるテキストの類型は多様である。

9 描出を狭義の「話法」としてとらえるのは、日本語に関しては無理がある。

### 【注】

1 以下、この名称の多様性は無視する。諸説に言及するときには、それぞれの論者の用語にしたがい、本稿の用語にそれを書き換えることはしない。

2 表現学会のシンポジウムの記録、一九九〇『表現研究』五  
二（描写をどうとらえるか）、一九九三『表現研究』五八（説  
明の機能）を参照。

3 描出の度合いということについては、思考の動詞を近傍の  
文にともなう例であるが、(7) がわかりやすい。

(7) ①仙吉は左手で額をおさえて机に肘を突いた。②確  
信を持てなかった。③確信を持てない。④だが、二十  
二三の時におれがこの詩の中で夢想していたこの故郷  
へ帰って暮すという生活に、とうとうおれは立ち到っ  
たわけだな、と彼は思うのであった。⑤仙吉は、それ  
に続いて、茂木ユリ子のことを考えた。

（伊藤 整『鳴海仙吉』新潮文庫11）

文②と③は、文末がタ系列と非タ系列とのちがいであるが、  
①から後方照応的に読みとるばあい、「仙吉」という固有名  
詞の表現が作用して、文③までが描出として判定される可能  
性がたかい。しかし、文④から前方照応的に読むのであれば、  
「おれ」の存在から、文③は描出か自由直接話法か、判定が  
つきにくくなる。しかし、文②は文末がタ系列であるためそ  
のまま描出としての属性を保ちうるのである。

## 【文 献】

Banfield, A. (1982) *Unspeakable Sentences*. Routledge and  
Kegan Paul.

Chafe, W. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time*. Univ.  
of Chicago Press.

Hamburger, K. (1973) *The Logic of Literature*. Indiana U. P.  
波多野完治（一九六六）『文章診断学』至文堂

堀井令以知（一九八三）「フランス語の自由間接話法」『表現研  
究』三八

保坂宗重（一九七七）「テキスト理論による文章の分析——日本  
語の体験話法について——」『日本語と文化・社会』5 こ  
とばと情報』三省堂

保坂宗重（一九八四）「G・シュタインベルクの体験話法研  
究」『茨城大学教養部紀要』一六・一七・一八

保坂宗重・鈴木康志（一九九三）『体験話法（自由間接話法）文  
献一覽——わが国における体験話法研究——』茨城大学教  
養部

小森陽一（一九八八）『文体としての物語』筑摩書房

工藤真由美（一九九三）「小説の地の文のテンポラリティー」  
『ことばの科学』6 むぎ書房

工藤真由美（一九九五）『アスペクト・テンズ体系とテキスト——  
現代日本語の時間の表現——』ひつじ書房

Kuroda, S.-Y. (1973) "Where Epistemology, Style, and  
Grammar Meet." Anderson and Kiparsky eds. *A  
Festschrift for Morris Halle*. Holt, Rinehart and  
Winston.

黒沢宏和（一九九四）「モダリテートから見たドイツ語の体験話  
法について」『文体論研究』四〇

中川ゆき子（一九八三）『自由間接話法』あぼろん社

中村三春（一九九四）『フィクションの機構』ひつじ書房

中山真彦(一九九五)『物語構造論』岩波書店

西尾光雄(一九六九)『日本文章史の研究 中古篇』塙書房

野村眞木夫(一九八二)『現代日本語体験話法研究序説——テキ

スト学的なところろみ——』『国語国文研究』六六

野村眞木夫(一九八三)『話法をどうとらえるか——日本語体験

話法を中心に——』『表現研究』三八

野村眞木夫(一九八五)『日本語総称文の語用論的考察——総称

性の度合いと文連統の型——』『国語国文研究』七三

野村眞木夫(一九九〇)『テキストにおける文脈展開の制約——

現代日本語総称文を視座として——』『弘前学院大学紀要』

二六

野村眞木夫(一九九二)『日本語総称文のテキスト的機能(2)——

非説明テキストにおける総称文を視座として——』『弘学

大語文』一七

野村眞木夫(一九九三)『説明』の機能——説明の表現の文脈

効果——』『表現研究』五八

野村眞木夫(一九九五)『国語国文学会の展望(Ⅲ) 国語学 近

代・現代(文章・文体)』『文学・語学』一四六

澤田治美(一九九三)『視点と主観性——日英語助動詞の分析

——』ひつじ書房

鈴木康志(一九八八)『ノンフィクションにおける体験話法』

『ドイツ文学』八〇

鈴木康志(一九九二)『一人称現在形として発現する体験話法』

『ドイツ文学研究』二四

寺倉弘子(一九九五)『描出話法とは何か』『日本語学』一四——

## 二

徳沢得二(一九六五)『体験話法のもたらすもの』『文芸研究』一

## 四

山田良治(一九五七)『現代作家と代行描写』『言語生活』七二

付記：本稿は、上越教育大学大学院において、一九九四年度

後期におこなった「国語学講読」の講義内容の一部を

修正したものである。

(上越教育大学)